九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

松平文庫蔵「姫宮私言」 : 翻刻と解題

渡辺, 真理子
九州大学大学院修士課程

https://doi.org/10.15017/12160

出版情報：語文研究. 35, pp.12-24, 1973-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

松平文庫蔵『姫宮私言』

—翻刻と解題—

渡辺真理子

一、序並びに本文翻刻

島原松平文庫の中に、「姫宮私言」と題する一冊の歌書がある。この本については、島津忠夫氏が「室町末期作。古今の序を敷衍したようなもの」との簡単な御紹介をされているが[注1]、ここに本文を提供し、解題を加えたいと思う。

この本の体裁を記す。大きさは美濃版。表紙は藍表紙で、雷文繋押型花文様。表紙左肩に墨流し模様短冊型の題簽が付され、本文とは異筆であるが近世初期の筆跡で「姫宮私言」と書かれている。書名は外題によるが、外題の事は後に述べる。なお、内題と奥書はない。本文料紙は楮紙と斐紙のまぜ漉きか。装釘は袋綴。本文は一面十行。一行十七字から二十五字。和歌は二行書きで、一行目は本文の肩より一字下げ、二行目は本文と同列である。本文の書写年代は寛文元禄の頃と思われる。本文中には所々に、本文と同筆でミセケチや書き入れが施される。墨付き全十丁。巻末に、元禄十三年に没した松平忠房の「尚書源忠房」及び「文庫」の蔵書印がある。以上の如き装釘は、松平文庫所蔵本の大半と同様である。

この本の性格を要約すると、古今集序の文章を借り、主に女流歌人の歌を集めて手本とした女子向けの教訓的歌論書という事になろう。

「国書総目録」によると、現在この題名で知られているのはこの一本のみである。他書の異名ではないかという怖れはあるが「大日本歌書綜覧」「日本歌学大系」「歌学文庫」等に見える歌書類には、この本と同一内容のものはない。また、「姫宮私言」という書名も、上記の歌書類をはじめとして今の所、他には一切見出す事ができない。現段階では孤本と言うほかなく、内容的にも、下に述べる如くややユニークなものがあると言えそうである。次に全文を翻刻する。

翻刻凡例

○原本にできるだけ忠実に翻刻するようにつとめ、仮名遣等は元のままにした。

○句読点は私意による。

○和歌は、見易いように本文より二字下げ、二行目も一行目と肩を並べた。歌に続く本文は、原文では続けて書くが、

改行した
○補入の文字は左側に。を付けて示した。
○ミセケチの場合は、訂正された文字の左側にヒの符号を付け、下に正しい字を書いた。
○本文に不審個所がある場合は、右側に（ママ）の注記を付した。
○各丁表裏の末尾ごとに、丁数とオ、ウの符号を付けた。

［姫宮私言］

やまと哥は、あめつちのひらけはしまりけるときより、いてきにけり。しかあれとも、世につたはる事は、久かたのあめにして、したてるひめにはしまれり。しかるに、たま〳〵哥とのみしりなから、人の世のわたくしことにおもひて、これをふかくまなふ人よむ人おほからす。あめのすさひには、れいもにといへることをさため、もろこしには、詩をもてあそひ、この日のもとには、やまと哥といへることを、世のまつりこと人のしわさ定をかれしよりこのかた、心なき野への草葉、山の木の葉もみなふく風をもて」（一オ）をのかこゑとなし、哥をきんするなるへし。しかのみならす、花になく鶯、水にすむかはつのこゑをきけは、世にいける物哥をよますといふ事なし。しかれとも、よろつのことはさは、たねなくしてみのなることなし。草木は露のうるひをえてをりふしの色をませり。あるは月日のひかりにあたりて、時をしり世をつく。物みなかくのことし。されは、哥は人の心をたねとすれは、あらはしてをしへをける事なし。このことの世にうつりゆくをかなしみおほして、延喜のかしこきみかと、なへてに哥をよませ」（一ウ）給ふて、人の心のかしこきとをろかなるとをしらしめ、たかきいやしき人をわかす、神の御代よりの哥をえらひあつめ、古今しふとなつけて世にのこしをきたまふ。万葉集は古今しふいまた撰さりしさきの事なれとも、時うつりことへたたりて世にしる人かたし。おほよそ、哥はむつのしなをはなれたるはなかるへし。かのなにはつの哥をそへ哥となむいへる。

なにはつにさくやこの花ふゆこもり今は春へとさくやこの花

この哥は、なにはつのみこにんとく」（2オ）天皇と聞へたまひける、おほむをとうとの宇治のみやと御位をたかひにゆつり給て三とせになれるとし、宇治の宮なくなり給たれは、わうにんといへる人この哥をよみてにんとく天皇へたてまつりける。さてこそ、この哥を御門の御はしめとは申なれ。これを哥のちゝとさためて、またあさか山のことの葉をは、ゝとなむ、あはせて手ならふ人のはしめ。にもしける。

あさか山かけさへみゆる山の井のあさくは人をおもふ物かは

この哥は、かつらきのおほ君といへる人、みかとより」（2ウ）国のつかさを給てみちのくにへくたられけるとき、采めなりける女ヒのをさそひゆきけり。ゆき〳〵てみちのくにのあさかといヒつへるさとにいたれりけれは、国の司まうけなとしけり。まうけとは、かつらきの大君をもてなすへきさけなと、もたせ行となるへし。ことをろヒもそかなりとて、大君の心とけすみなすさましかりけれは、采女なりける女かはらけとりて、この

うたをよみてたてまつれりける。まつ、ところはあさかのさとなれはあさか山といひいたして、かけさへみゆる山の井と、いかにもあさき物なるへし。」（3オ）それにおほ君の心をよそへてよめるとなり。されは、人はいかなるへき事も、ところにより人によるへし。かつらきのおほきみほとの人の、あやしのしつ山かつなとを思ふ物かは、とよめるなるへし。これにそ大君の心とけにける。それうたは、めにみえぬおにかみをもあわれとおもはせ、たけきもの、ふの心をもなくさむるとはこれなり。いまの哥、世中はいろにつき、人の心花になりて、まことある人なし。されはよめる哥さへあたにして、まめなるところには、はなすすきほにいたすへき事にもあらすなりにたり。」（3ウ）いにしへのことの葉にも、つるかめによそへて君をいわひ、ふしのけふりにたくへて人をこひ、草の露水のあわをみて、世の中のはかなき我か身のゆくゑをおとろき、むは玉のよるのねさめにもこの哥をおもはむ人、この世のさかへおとろえをもしりのちの世のつみをものかるへき物か。

ことの葉のかなはぬみちとのちの世とふたつならてはねさめにもなし

かやうなるや、まとことある人の心なるへき。なを、をうなの哥はつねにはかはるへきか。それ小野のこまちかうたのすかた」（4オ）をのみ、をうなの哥のしなにはおほえ侍る。つらゆきかこと葉にも、をの、こまちか哥はそとをりひめの流なり。あわれなるやうにてつよからす。いは、よきをうなのなやめるところあるににたり。つよからぬはをうなの哥なれはなるへし、といへり。哥のすかたのやさしくおもしろけれは、よき女にたとへ、哥のよはきを、をうなのなやめるところあるにたとへたるなるへし。

おもひつ、ぬれはや人のみえつらむゆめとしりせはさめさらましを」（4ウ）

色みえてうつろふものは世の中の人の心の花にそありける

又、小野の小町かつま大江のこれのりか心かはりするほとに、世の中物うくなり行ころ、ふん屋のやすひて、みかはのかみになりてくたりける時、小野小町か心をもなくさめて、あかてたみにいさとさそひしに

わひぬれは身をうき草のねをたへてさそふ水あらはいなむとそ思ふ

といひてつかはしけるとなん。いつれもあはれふかくなさけありて、をうなのまなふへき哥なるへし。その哥といへる」（5オ）すかたは

郭公なくや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

これはほと、きすのさかりになく事、さ月のころほひなれは郭公なくやさ月といひはしめて、あやめ草とをけり。こ、まては哥のそこなり。あやめもしらぬといはんとて、あやめ草とはいへり。人を恋わひて、心そらおほれたるやうにして、物のあやめもわかぬなるへし。泉式部か哥にわ

われのみやおもひをこせむあちきなく人はゆくゑもしらぬものゆへ

これ、藤原のつね」（5ウ）まさの朝臣にくしてたんこのくにへまかりけるに、しのひて物いひけるおとこのもとへつかはしけるとなむ。又おなしよめる哥

竹の葉にあられふるなりさら〱にひとりはぬへき心ちこそせね

これはたあやしく、さすかにあわれなりけり。この心はへはかならすとたのめけるおとこの、今やいまやとまちけれともこさりけるに、竹の葉にあられふりか丶りたるをみてよめりけり。さかみか哥には

ありふるもくるしかりけりなかからぬ人の心を」（6オ）いのちともかな

あわれはこれやまさりなん。ありふるといへるは、いたつらに世になからへたるはくるしけれは、しぬへくおもへと、つれなふいのちのいけるを、われにほとなくうとみたるおとこの心みしかさをとりかへて、われのみはやくこの世つきなんとなけきたるなり。その哥人にかはらては、あちはひをろかなるへし。清少納言か哥には

わすらる丶身はことはりといひなから思ひあへぬは涙なりけり

これは心かはりしたる男にいひつかはしけるとなむ。数ならぬ身をは」（6ウ）たれもわするへき事はりなるを、涙はおもひしらてやおちぬる、とよめり。たいけむもんゐんのほり河か哥

あた人はしくる丶夜はの月なれやすむとてえこそたのむましけれ

と。おもへはくもりかちに、うき雲のさためなきさま、あたなる人の心、ことならんや。すほうの内侍か哥に

春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくた丶む名こそおしけれ

春の夜はことに夢はかりみしかき物なり。月かすめる夜のおも」（7オ）しろきに、ねやの戸にさしいりて、枕もかなとひとりこちけるをき丶て、ある人、これをなん枕に、とて手をさし出しけるによめるとなむ。おなしくよめる哥

春雨のけふふりそむるかひありて山のこすゑそうすみとりなる

きさらきはかりに雨のしめやかなる日、南殿の山のけはひをみれは一しほのけしきにて、よめるとなり。いつれも、をうなの哥のすかたは大かたかはるところなんなき。されと、よしあしはいかてまたさため侍らん。むかしの哥人」（7ウ）のよめるうちに、みみにたつふしもなく、こと葉のたくみもみえす、をのつからうちまかせたるさまの、さすかにあわれもふかく、たけたかきを心あひにみをよふを、よき哥と思ひてまなひ給ふへし。み丶にたちたる哥とは

五月雨にしらぬそま木のなかれきてをのれとわたすたにのかけはし

これらはことに、くひきれ哥とて、五もしつ丶かす。さみたれとをきたらは、五月雨のふるとも、又は雲とも、又はそらともつ丶けてあるへきに、さみたれにしらぬ」（8オ）とはさらにつ丶かす。さてこそくひきれ哥とはいひけれ。おなしくまなふましき哥のさま

世中のうきたひことに身をなけてはひとひに千たひわれやしにせむ

これらのたくゐ、みなうちきくより、こと葉もこはたちて更

にとりとめたるよしなし。ことに我やしにせむをはよみ給ふへからす。世をほめ、君をいわふ哥には

　春日野にわかなつみつゝよろつ代をいわふこゝろは神そしるらん

　よろつ代を松にそ君をいわゐつる」（８ウ）千とせのかけにすまむとおもへは

これらの哥なるへし。又せむ（ヒ）とへちの哥

　たらちねのおやのまほりとあひそふる心はかりはせきなとゝめそ

これはをのゝちふるか、みちのくにのすけにまかりける時に、は、のわかれおしみてよめるとなん。

　あかすしてわかるゝ袖のしらたまを君かかたみとつゝみてそゆく

わかれをおしむ哥はこれらのたくひなるへし。あひしやうの哥、

　なくなみた雨とふらなむわたりかわ」（９オ）水まさりなはかへりくるかに

これはいもうとのなくなりたりける時に、をのゝたかむり（ヒら）らのあそむ、よみける哥なり。わたり河とはしての山もとにありといふさいつかはなるへし。我か涙の雨のことくふれかし。もしさいつ河の水まさらは、わかれたる人のかへりもやくる、とよめるとなむみゆる。それ哥は、この世のもてあそひのみならす、生老病死のことはりをわきて、（ママ）のちの世のまよひをしるなれは、かみほとけのみちおなし。よはひ我か身のさひわひありてとみさかへ」（９ウ）たりとて、まとしきをいやしむる事なかれ。さかりなる物はつゐにおとろへ、あへる物ははなるゝ事しかなり。春のあした鶯のさへつり、花のさきちるをみ、秋のせみのこすゑに吟し夕くれは、木の葉のおつるをきゝ、あるはまつ山のなみをかけ人をおもひ、野中のしみつをむすひていにしへをしたひ、松むしのねにともをしのひ、をみなへしの一時をくねるにも哥をいひてそなくさめける。これをふかくたつねは、大空にすめる月にむかへるなるへし。」（10オ）大かたの心ならはしはあさましき事にこそ」（10ウ）

二、書名

「姫宮」とは、ある特定の人物をさすのではなく、源為憲が尊子内親王に「三宝絵詞」を献じ、俊成が式子内親王に「古来風躰抄」を撰進した故事にならい、さる高貴な女性に奉ったという形式をとったかと思われる。少なくとも内容には「姫宮」の実在を思わせるものはない。女子に対する歌論書として、このような形をとって権威づけを試みたのではあるまいか。

次に、「私言」の読み方であるが、文明本節用集には「サヽメゴト」という訓がある。この時想起されるものが心敬の連歌論書「さゝめごと」である。この書の伝本の中には、明応二年の奥書を持つ松平文庫所蔵の古写本の如く「私言」の字を使った題を持つものがある。この言葉は、心敬の書が出て以来、歌論書における「聞書」や「口伝」等と同様な意味で使用されるようになったのではないだろうか。さればこそ、「日本歌学大系」本の如く、著者の名を冠して「心敬私語」と題される本もあるのであろう。類似の書名としては「定家物語」「徹書記物

語」「兼載雑談」などがある。このように考えると、「姫宮私言」は「心敬私言」を摸して題された書名であると思われる。しかし、この場合には「姫宮」は著者ではなく、「私言」を捧げられた対象と取らざるを得ない。

この本の書名は、前述の如く外題を採用したものである。この題箋が後世貼付されたとすると問題であるが、近世初期と思われる筆跡により、元題箋と推定される。(本文と書写年代はほぼ同じである。)従ってこの書名そのものも、元来のものと考えられる。

三、成立年代

この本には奥書がなく、他書にも書名が見えない。従って成立年代を推定するには内容を検討するほかない。装釘や印記は同文庫における大多数の本と同じ[注2]である。それらは忠房及びそれ以前の蒐書にかかるものとされ、殆どの本の成立はそれ以前である。「姫宮私言」の原本も、おそらくは室町末までに成立していたと思われる。上限は「悦目抄」[注3]初出の歌がある事によって、「悦目抄」が成立したと言われる鎌倉末から室町初にかけての時期である。ところで、前述の如く書名に関して「ささめごと」が影響している可能性が強い。故に上限は「ささめごと」の成立した寛正[注4]四年(一四六一)に引き下げられる。

この本の内容は、四部に分かれる。第一部では古今集の序を種本として和歌の起源、および難波津の歌と浅香山の歌の故事を述べている。第二部では、女の歌の手本として、小町以下六名の女流歌人の歌及び読み人しらずの歌が、簡単な解説付きで一〜三首ずつ取り上げられている。第三部は「まなぶまじき歌」、祝歌、餞別歌、哀傷歌の例があげられている。第四部は、和歌の仏教的功徳を古今集の序を借りつつ説いている。

以上のような内容は、現在翻刻されている中世の他の歌書類とは、少々趣を異にする。即ち、「了俊一子伝」や「釣舟」等の啓蒙的歌学書には必ず詳細に記されている具体的作歌の方法(題詠の詠み方、稽古の心構え、本歌取りの要領など)が、この書には全然載っていないのである。また、定家を始め、和歌の宗匠の歌や説がない。例歌として引いている歌の出典は、古今集が九首のほかは、詞花集五首、千載集一首、その他五首、出典不明一首であり、新古今集以下からはとられていない。しかも、従来歌学書等にとりあげられた事のない歌が多い。

これらの事は、この本が女子向けの歌書である事とも関連があると思われる。正統的な歌論書よりも「乳母のさうし」「身のかたみ」などの室町初・中期の女子教訓書、特にそれらの歌道や仏道に言及した部分と似ている所がある。

> うちみえしあたりは、歌の心やすらかに、くちおとなしうよみなし、春ははなさくをまち、秋は月のひかりをあはれび、飛花落葉のことはり、ことのはにみえたり。[注5](身のかたみ)

しかし、それらの教訓書の如き、教えを授けるという口調でない部分も多い。他に種々の要素が混在している。それについては後述するとして、最後の文章の

> 大かたの心ならはしはあさましき事にこそ

という、他の手段による教育を否定するが如き口ぶりから推察すると、前記の一般的な女子教訓書とは隔りがあるにしても、

室町中期あたりの源氏物語をはじめ文学が女子のしつけの中にとりいれられたという風潮[注6]の中において、考える事ができる。そのような教訓的和歌観こそ執筆の一因ともなったであろう。

また、先にあげた内容上の特徴から察すると、各派が対立抗争し、特定の歌集や歌人を崇拝していた当時の専門歌人と、この書の作者とは少し隔りがある。しかし後述する如く、古今集の注釈書等の説を継承している事を考え合わせると、作者は専門歌人ではないが、かなり和歌に興味を持っていた人であろう。もし歌人が書いたとしても、ほんの手すさび程度のものであろう。

なお、語彙・語法の点で、成立年代を推定する手がかりとなるようなものはない。但し「餞別」を「せむべち」、「三途川」を「さいつ川」と撥音を「む」「い」を以て表記する点に擬古文的傾向が見える。中世の古辞書類には、それぞれ「せんべつ」、「さんづ」ととなっている。(文明本・易林本節用集等)

四、中世古今集注釈書との関連

第一部及び第四部は、古今集序の章句をそっくり借りるか、多少とも文意をとっている文章で大部分が綴られている。その自在な引用の様子は、作者が古今集序にかなり通じていた事を示す。しかし古今集序原文の整然とした論理的な構成には及ぶべくもなく、漠然としたまとまりのないものになっている。なお、仮名序だけでなく、真名序や新古今集の序にも一部よっている。

さて、第一部の中に直接古今集序によらない。次のような文がある。

あめのすさひには、れいもにといへることをさため、もろこしには、詩をもてあそひ、この日のもとには、やまと哥といへることを、世のまつりこと、人のしわさ定をかれしよりこのかた、心なき野への草葉、山の木の葉もみなふく風をもてをのかこゑとなし、哥をきんするなるへし。

全体として意味が通らず、間に脱文があるのではなかろうか。ここには、いわゆる和歌三国伝来説が現れている。その場合「あめのすさひ」が何を指すのか問題となろう。「天竺」の訓読とすると都合がよいが、「竺」の訓は古辞書によると「アツシ」のみである。しかし、後に示す和歌三国伝来説の例から考えて「天竺」の事を指していると見たい。故に「あめのすさひ」の「あめ」は「天竺」の「天」を訓読し、「すさひ」は誤写、若しくは次の行にあった「もてあそひ」が目移りしたものと、考えておく。

和歌三国伝来説は、鎌倉末期に「古今和歌集聞書三流抄」に登場[注7]して以来、中世の古今集注釈書、謡曲、連歌論書まで広く流布した。後に「沙石集」以下の「和歌陀羅尼説」と結びつき、歌道仏道一如観という中世的な思想に合致して、一般に受容されやすかったのであろう。その初期の形である「毘沙門堂本古今集註[注8]」所載の説は以下の如くである。

天竺ニ禮文トテ六義ヲ宗トシテ弄ブ事アリ。其ヲ倶摩羅什三蔵習テ唐土ノ詩ノ六義トス。其ヲ日本ノ希世丸ノ宰相天智天皇ノ御時遣唐使ニテ習テ、日本ノ歌ノ六義トスル也。

「古今和歌集聞書三流抄[注9]」(以下「三流抄」と称す)には、「礼文」が「乱文」となり――おそらく誤写であろう――人名が

相違している以外、ほぼ同様の説がある。ところが、管見の範囲では、「了誉注」（応永13年成立）以下殆どの古今集注釈書では「天竺の礼文」とあるべき所が、「天竺の梵語」となっている。また、六義と結びつけていない。注釈書以外に目を転ずると、世阿弥から金春禅竹に相伝したという「六義」[注10]に

六義者、古今注云、天竺礼文、唐詩賦、日本和歌、三国和来(ママ)、依て大和哥云ゝ。

という、「三流抄」の説を受け継いだ記述が見られる。更に、謡曲「白楽天」[注11]に、次のような所がある。

天竺の霊文を唐土の詩賦とし、唐土の詩賦をもってわが朝の歌とす、

「姫宮私言」では、「れいもに」とあり、「礼文」説を採用している。この事から、この本は中世の古今集注釈書のうち、「三流抄」や「毘沙門堂本古今集註」の如き附会説話中心に鎌倉末に成立したもの、及び謡曲との関連が深いと言えそうである。

このほかに注目すべき部分は、「難波津」「浅香山」両歌の故事来歴である。まず「難波津」の歌の注釈は、古今集序の古注と殆ど同様であるが、人名が「なにはづのみこ」「宇治の宮」と簡略になっている。これは古今集注釈書等にもしばしば見える事である。類似の呼称をあげると「三流抄」で「難波津王」（但し、話の筋が違う）、「毘沙門堂本古今集註」で「難波津宮」、「古今栄雅抄」[注12]で「宇治宮」、という所である。

「浅香山」の歌の説明の中では、葛城の王が釆女を誘って陸奥へ下ったという点と、歌の解釈で釆女が山の井に王の心をたとえ、「かづらきの大君ほどの人のあやしのしづ山がつなどを思ふものかは」としている点が、他の多くの注釈書と異る。前者の説をとっているものをあげると、「三流抄」、「毘沙門堂本古今集註」に「近江ノ釆女ヲ具シテ下ル」とあり、「了誉注」[注13]に「駿河ノ国ヨリ参タリシ美女ヲ釆女ト名ヲ賜テ……配所マデ具セラレタリ」とあるほか、「古今私秘聞」[注14]にも見える。一方、後者の説は次のような諸注に見える。

意ハ、大臣程ノ人ノ雑事悪シトテ腹立玉フ。浅ク見ユル振舞ナリ。（三流抄）

此歌ノ心ハ山ノ井ハ木葉チリ入ル故ニ深モアサクナルナリ。其様ニ大臣程ノ人ノ土民ヲシカリ給フカトハヂシムル也。（毘沙門堂本古今集註）

よめるこゝろは、王などのあさく心を人に見えぬものぞと山の井によせていさめけるに（古今栄雅抄）

特に前二著の「大臣程ノ人ノ……」という部分と、「姫宮私言」の「かつらきの大君ほとの人の……」という部分とが似ている。

第二部にも、古今集注釈史上注意されるべき個所がある。それは、小野小町の「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」[注15]という歌の説明である。この歌は、古今集第938番（巻十八・雑下）の歌であって、次の詞書がある。

文屋のやすひでがみかはのぞうになりて、あがたみにはえいでたゝじやと、いひやれりける返事によめる

「姫宮私言」の「大江のこれのりが心がはりするほど」という部分は、注釈書等によるのではないかと思われる。この歌は、十八巻のほかに、序の古注の部分にある。即ち六歌仙評の小野小町の部分に附加されている三首のうちの一首である。「三流

抄」の、その歌の注に、

此哥ハ業平ニ捨ラレテ歎キケル比、文屋康秀三河守ニ成テ下リケルガ田舎ヘ下リテアソビ玉ヘト云ケル返事ニツカハス。

とあり、「色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」の注は、

此哥ハ大江惟章ガ妻ト成ケル時ニ、惟章ガ心替リシテ藤原朝行ガ聟トナリケル時ヨメル。

となっている。なお、この説は「古今栄雅抄」に殆どそのままの形である。

この二首の注を混同した形になっているのが、謡曲「関寺小町」[注16]の一節である。「わびぬれば……」の歌の次に

これは大江の惟章が、心変はりせしほどに世の中もの憂かりしに、文屋の康秀が三河の守になりて下りし時、田舎にて心を慰めよかしとわれを誘ひしほどに詠みたりし歌なり

との詞章がある。これは最も「姫宮私言」の説明に近い。前述の和歌三国伝来説が「白楽天」に現れる事など、多くの例によって、世阿弥を中心とする謡曲には古今集注釈書[注17]——特に「三流抄」——の影響がある事が、多くの先学によって説かれている。この「関寺小町」に見える説もその一例であろう。時代的には「三流抄」、「関寺小町」、「姫宮私言」の順である。しかし、「姫宮私言」の説が、「三流抄」から「関寺小町」を経由してきたとするのは、いささか早計に過ぎよう。「三流抄」と他の二著との間には、前述のような相違がある。また、「三流抄」「関寺小町」が「田舎」という平易な言葉を使っているのに対し、「姫宮私言」は「あがたみ」という注釈を必要とする言葉を残している。ここで私は一つの推論を試みたい。

「三流抄」の説が地下の連歌師層に受容され、講ぜられていく段階で、「わびぬれば…」の歌と「色みえで…」の歌の注とが混同せられ、在原業平に大江惟章が取り違えられた説が普及した。その説が「関寺小町」や「姫宮私言」に、相互には何の関連もなく、取り入れられたと見る。つまり、口授された俗説や、「三流抄」に多少自説を加えた注釈書が、「三流抄」とこの両著との間に介在したと考えるのである。

これ以外の前述の例によっても、「姫宮私言」と「三流抄」（「毘沙門堂本古今集註」や「古今栄雅抄」は、「三流抄」の説を祖述していると見る）及び謡曲との関連が深い事があきらかである。この事実は、これらの書に啓蒙的性格が共通している事による当然の帰結であろう。即ち、「三流抄」という附会説話中心の中世的性格が強い注釈書の説が、多少の変遷を伴いながら連歌師の講説などで広く世間に広まり、それを受け継いだのが謡曲であり、「姫宮私言」であると言えよう。

わずか二、三の例で上記のような結論を導き出す事には、多少の危惧があり、他の可能性も考えられないではないが、一応「姫宮私言」と古今集注釈書の関連を上記の如く推測してみた。

五、女の歌の理想像

第二部は、前述の如く有名女流歌人の歌を選んで、注釈を施したものである。各歌の注釈は、殆ど勅撰集所載の時の詞書をそのまま使っているに過ぎない。ちなみに歌人別に各歌の出典を記すと次の如くである。

小野小町　古今集3（すべて仮名序の古注にあり）
泉式部　詞花集2
相模　詞花集1（金葉集と重複）[注18]
清少納言　詞花集1
待賢門院堀川　詞花集1
周防内侍　千載集1　周防内侍集1（萬代集に入る）[注18]
読み人知らず　古今集1

いずれも恋歌、或は男女間の贈答歌である。このように女流歌人の歌のみを選んでいる所に、「姫宮」への献呈書の形をとっているこの事の独自性がある。

この部分の最初に

なををうなの哥はつねにはかはるへきか。それ小野小町かうたのすかたをのみをうなの哥のしなにはおほえ侍る。

とあり、小町の歌の注釈の次に

いつれもあはれふかくなさけありてをうなのまなふへき哥なるへし。

という所がある。これらによって作者の女の歌に対する考えを知る事ができる。ここに記載されている順序に従って、それぞれの考えに影響している書を調べてみたい。

女の歌が普通の歌と異るという事は、「和歌大綱」「悦目抄」「和歌肝要」などの偽書にはっきりと認識されている。

歌又人によりてよみかふる物也。ちご、女の歌はあながちにつよきもはしたなし。さればとてとらへたる所なきも正躰なし。やはらかによみて、をかしきふしあるべし。（和歌大綱[注19]）

小野小町が女の歌の理想であるという事は、言うまでもなく古今集序の小町評の影響が大である。その考えが「和歌口伝」[注20]にも受け継がれている。

はかなしやたのめばこそはちぎりけめやがて別れもしらぬ命に　同人（俊成女）

女の歌は是躰に侍るべきにや。小町がふりによむべしとぞ申侍りし。

「あはれふかく」という事は、古今集序の小町評に「あはれなるやうにてつよからず」とあり、それを模倣したものではあるが、「秋風抄序」[注21]にも見える。

皇太后宮大夫俊成女はあはれなるやうにてまことすくなし。

その他に注目すべき事は、前述のこの部分の和歌がすべて恋歌、或は男女間の贈答歌である事と、「徹書記物語」[注22]「兼載雑談」[注23]に見える、恋歌として女の歌を重視する考えとの関連である。

一、戀のうたは女房のうたにしみいりて面白きがおほきなり。
（徹書記物語）

一、戀の歌を常によめば、言葉やはらかにやさしくなるとなり。戀の歌は、女房の歌を本に見るべしとなり。
（兼載雑談）

この一流における「女房のうた」とは、式子内親王・俊成女・宮内卿という新古今歌人が中心であろう。その点「姫宮私言」との相違が見られる。しかし、当時このような考えが常識的なものとして、存在していたのであろう。故に「姫宮私言」の著者は、女の歌の手本として恋歌を集めたと考えられる。

「姫宮私言」は女流歌人の歌を集成し、女子の詠む歌の理想像をそれらに求めた点に独自性がある。しかし、その事は「女

房三十六人歌合」や、以上にあげた歌論書の所説の延長線上に出現したのである。

六、仏教思想の影響

第四部、及び第一部の後半に、仏教思想の影響が色濃い所がある。引用すると次の如くである。

むは玉のよるのねさめにもこの哥をおもはむ人、この世のさかへおとろえをもしり、のちの世のつみをものかるへき物か。
ことの葉のかなはぬみちとのちの世とふたつならてはねさめにもなし
かやうなるやまと（ヒ）ことある人の心なるへき。
（以上一部より）

それ哥は、この世のもてあそひのみならす、生老病死のことはりをわきて、のちの世のまよひをしるなれは、かみほとけのみちおなし。よは（ママ）ひ我か身のさひわひありてとみさかへたりとて、まとしきをいやしむる事なかれ。さかりなる物はつゐにおとろへ、あへる物ははなるゝ事しかなり。
（以上第四部より）

第一部の最後の歌は出典不明であり、おそらく作者自身が作った、教訓歌めいたものであろう。第四部は「生老病死」及び「盛者必衰・会者定離」という仏典の章句を、敷衍している。

和歌を仏教的に解釈する事は「古来風躰抄」以来中世の歌論書には、頻出する。しかし、「姫宮私言」の所論は「三五記」の牽強附会的歌道仏道一如観や、「さゝめごと」における仏道と歌道との相剋の上に打ちたてられた歌道仏道一如観とは、かなりの隔りがある。無常を感じさせ、菩提の因縁となる事を和歌の徳として説く姿勢は、「釣舟」[注24]や「かりねのすさみ」[注25]、更には連歌論書の一部に共通する。

歌をよまんと思はん人は、やまともろこしのあはれなるためし、仏法世俗の道までも心にかけ、つねは世のはかなき事を観じて、後の世の實のみちをねがひ………
（釣舟）

春さり秋くれ、花散り葉おつ。是みな有為転変のことわりと無常心を観じ、何事にも我とする事をとゝめ、心の邪をさけ、欲情貪着を離れ、一心の円鏡に向ふ時、ともすればうかび来る憂き世のくさ〲の事を心のたねとして、言葉にいひ出づるを、吾朝の歌と名づくる也。
（かりねのすさみ）

特に、連歌論書に於ける「飛花落葉の観念」を連歌が催し、菩提の因縁となるという考えは、連歌と和歌の違いこそあれ、「姫宮私言」に近い。「筑波問答」など初期の連歌論書では、和歌に比し連歌はその性格上菩提の因縁になり易いと述べ、それが地下連歌流行の原動力になったという事である[注26]。その考え方が、後代和歌にまで及んだと見るのは穿ち過ぎであろうか。例えば「連歌諸体秘伝抄」[注27]に、

四季草木のうへにては、飛花落葉を観じて、生老病死のことはりをさとりて世間の夢のあだなる事を身の上にひきかけて心を幽玄にやさしくいひなして………

という部分があり、宗牧の「四道九品」[注28]には、

惣じて連哥師の心持、慈悲正直を専として、有為転変の理を句毎に思ひ、飛花落葉によそへても世間の栄への夢幻ならん事を思ひ花鳥風日に付ても此世の定なくあだなる事を悟るべし。

という説が述べられている。これらが、中世の地下連歌師の平均的思想である。連歌と仏教とは、連歌師の多くが僧形をしていた事によっても、結びつきが強かった。「姫宮私言」は、古今集注釈書との関連の際考えられた事や、書名の点から考えても、連歌師の影響を無視できないかもしれない。そうすると、この仏教思想の影響も、歌論書を通じてのものとするより、連歌論書を通じてのものと考えた方が妥当であろう。中世、連歌師たちは古典文学の一般化の為に大きな役割を果たした。本書も作者が連歌師であるとまでは言えないが、連歌師の古典的教養に負う所があったのではないだろうか。

　以上述べて来た「姫宮私言」の紹介を要約すると次の如くである。この書は古今集序を敷衍し、注釈書の説をとり入れているが、例歌や構成面から見て、当時の歌壇とは孤立している。書名、古今集注釈書の影響、仏教思想の影響の諸点から、地下の連歌師との関連を看過できないと思う。また、直接の執筆理由としては、当時流行の女子教訓書に啓発された事が考え得る。本書は中世の古今集注釈史上、或は女子教訓書を考える上の一資料を提供するものと信ずる。

注

(1)「肥前島原松平文庫」（文学昭和36年11月号）
(2)注1)による。
(3)「悦目抄」の成立年代は明らかでない。久曽神昇氏は「為世の時代あたり」（日本歌学大系解題）とされ、「群書解題」では「鎌倉末期から室町時代にかけて、仮托書流行の時代風潮に動かされてできあがったものである。」とされる。
(4)草稿本系統の成立は、木藤才蔵氏が提唱された寛正四年説が、ほぼ定説となっている。（校註ささめごと）
(5)群書類従による。
(6)今井源衛先生「王朝物語の研究」三六〇頁
(7)三輪正胤氏「鎌倉後期成立の古今和歌集序註について（中）」（「文庫」17号）
(8)未刊国文古註釈大系四巻による。鎌倉末期成立か。
(9)片桐洋一氏「古今和歌集聞書三流抄――解題と本文――」（女子大文学第22号）による。弘安末年成立とされる。
(10)「世阿弥自筆伝書集」による。
(11)日本古典文学大系「謡曲集下」による。
(12)明応7年成立。飛鳥井雅俊著。九大図書館蔵延宝2年刊本による。
(13)応永13年成立。九大図書館蔵「古今序註」明暦4年刊本による。
(14)猪苗代兼載、兼純著。永正5～7年成立。赤羽淑氏「ノートルダム清心女子大学古典叢書」による。
(15)日本古典文学大系「古今集」による。
(16)日本古典文学大系「謡曲集上」による。
(17)前掲論文(7)、(9)のほか伊藤正義氏「謡曲『富士山』考」（言語と文芸」64号）、熊沢れい子氏「古今集と謡曲―中世古今注との関連において―」（国語国文45年10月号）など。
(18)詞書や本文から出典は「詞花集」並びに「周防内侍集」とすべきである。
(19)日本歌学大系第四巻による。
(20)日本歌学大系第四巻による。
(21)同第四巻による。
(22)同第五巻による。

(23) 同第五巻による。
(24) 同第五巻による。
(25) 群書類従による。
(26) 浜千代清氏「連歌と仏道」（仏教文学研究㈣所載）
(27) 古典文庫「連歌論新集」（伝宗紙）
(28) 岩波文庫「連歌論集下」

〔追記〕

本稿脱稿後、新に発行された片桐洋一氏著「中世古今集注釈書解題二」を拝見した。同著には、従来未翻刻の注釈書が幾つか翻刻され、また、「研究篇」に於いても関連した注釈書の本文の引用がなされていた。これらによって、この論文の第四章〈中世の今集注釈書との関連〉に聊補足すべき事実を知り得たので、次に記す。片桐氏の偉業に感謝の意を表したい。

まず、和歌三国伝来記を伝えている注釈書は数多いが、その中で「三流抄」にのみ見える「乱文」という言葉を使っているのは、大東急記念文庫本「古今和歌集聞書」、京大付属図書館中院家旧蔵書「古今序抄」、東山御文庫蔵「古今和歌集聞書」の三書である。これらの書は、この点から見ると、「三流抄」等の初期の注釈書を素直に受け継いでいるといえよう。

また「古今和歌集頓阿序注」は、難波津の歌の本説における人名の点と、浅香山の歌における「采女が葛城の王の供をして下った」という点において、「姫宮私言」に一致する。

なお、小野小町と大江惟章の関係は、「弘安十年古今集歌注」や、伊勢物語の注釈書「星宮口伝」にも伝えられている。

受贈図書　47年10月～48年6月

文芸論	春日和男
天地のはじめ（古事記上巻真訳 その1、2）	春日和男
対山館文庫目録（国文学関係）	伝習館郷土文庫
西日本歳時記	小原菁々子
能古	小島吉雄
近世文学　作家と作品	中村幸彦
三本対照　捷解新語　本文篇	浜田敦
鏡花全集　1～28	谷口鉄雄
荷風全集　1～28	谷口鉄雄
今川為和集(中)（中世歌書翻刻　第4冊）	稲田浩子
秋成（第35回展）	天理図書館
名古屋大学国語国文学論集（松村博司教授定年退官記念）	名古屋大学国語国文学会
王朝　第六冊	王朝文学協会
日本近代文学大系48　大正短篇集	助川徳是
イソップ伝の研究	島田清太郎
図書寮叢刊　詞林金玉集　上巻	宮内庁書陵部
原始日本語研究―日本語系統論への試み―	神戸学術出版
中世文芸叢書　別刊Ⅲ	広島中世文芸研究会